

子どもたちの自由な発想を大切に

誰でもじゃぶじゃぶネットワークを使える環境を

山口県教育研修所 神村信男研究指導主事（前・山口大学教育学部附属光中学校）

<プロジェクト以前>

もともとBasic言語を用いCMI関係ソフトや植物検索ソフトを開発したりしていました。そのことから文部省（現・文部科学省）のコンピュータ教材開発プロジェクトに参加し、学びの道具としてのコンピュータの活用の研究を行っていました。また、コンピュータ教育の視察などを目的に文部省の海外派遣で2か月ほど米国に滞在した経験があり、その時米国のコンピュータの活用状況を見てショックを受けました。視察したどの中学校のどの教室に行ってもMacintoshのコンピュータが置いてあり子どもたちが自分の学習に使っていました。まだ、ネットワークはなく、個々の習熟度学習にも活用され、「私は をクリアした」などと言っていました。帰国後苅宿先生（現・大東文化大学助教授）が、コンピュータを使って木の年輪の疎密を音符に置き換えた記事を見て、感銘を受け、すぐ苅宿先生に電話しました。Macintoshの可能性に驚嘆しました。

実践の経過、教訓

サイエンス部で活用を開始

当時からコンピュータと教育の専門誌に記事を書いていたことで、様々な情報が入手できました。インターネットについては、「米国の国防総省で使っていたものが民間に開放される。良く分からないが、世界が見えて情報交換ができる」と聞き、大いに興味を持っていたところちょうど100校プロジェクトへの参加募集の記事を見て、すぐに応募しようと思いました。ただ、光中学校は大学附属学校として研究もあるので、学校全体での取り組みとして参加することについては他の職員にかかる負担をできるだけ少なくなるようにすることで職員には了解が得られました。そのとき、私は、会議で「研究や報告など諸々のことはすべて自分がやる。皆には負担をかけない。恩恵を感じたら参加してほしい」と述べたのです。100校プロジェクトでは、クラス・授業ではなく、当時担当していたサイエンス部に所属する限られた子どもを対象にコンピュータで作品作りをしたりしていました。そのうち、中学校2年生のN君が学校紹介のホームページを作りたい、と言い、約2週間でテキストエディターを使用して学校紹介のホームページを作りました。現在のように簡易作成ソフトがなく、作成が大変困難であり、生徒の作ったホームページとしては多分、全国初のものだったと思います。



メディアキッズの立ち上げに参画

当時、御茶ノ水女子大学附属中学校の佐藤先生が中心となり共に活動していたACE（Association of Computer and Education）「教育とコンピュータ利用研究会」の主催するPOEM（the Party On Education of Multimedia）会議が飛騨高山市で開催されました。そこで、私がアップルコンピュータ（当時）の内村氏、中川一史先生（現・金沢大学助教授）と出会い、メディアキッズ（インターネットを使った学校間交流プロジェクト）参画のきっかけとなりました。中川先生のコンセプトが面白く、子どもたちが「じゃぶじゃぶ使うネットワーク」を学校生活に活用してみるようになったのです。

子どもたちの自由な発想、コンピュータ室に鍵をかけないといったことをモットーとしたのです。

当初は、ハイパーカードで自己紹介をし合い、気に入った自己紹介カードにはコメントを書き合っており、電話回線で北海道や東京、横浜の学校と交流していました。100校プロジェクトが始まり、インターネットに移行し、交流もそれに伴い拡大していきました。子どもたちの内面が引き出せ、作ったもので交流できるといった様子を研究授業で見せると、光中学校の先生方は「これなら自分も実践できる」という感触を持ったようです。

インターネットに接続できたのは100校プロジェクトのおかげですが、当時はまだ同プロジェクトの

参加校内では交流学习がなかったので、交流は主にメディアキッズでしていました。また、光中学校はその頃から既存のイントラネットとインターネットを結んでいたことで、子どもたちはそれぞれの教室にある端末から自由にインターネットを利用できました。

米国で夢見た、普通教室にコンピュータを設置し、さらにはインターネットに接続し、どこでも、だれでもじゃぶじゃぶ使うコンピュータとネットワークが、他校に先駆けて実現できていたのです。

メディアキッズを個人で引き継ぐ

その後、私はNHK学校放送の宇佐美さん（現・NHKエンタープライズ21）に声をかけられ「ふくむる環境学会」に参加し、環境をテーマにした交流に力を入れるようになり、平成9年第48回放送教育研究会全国大会の参加校である岡山市立平福小学校（当時）の三宅先生とも連携をとりました。

また、メディアキッズへの企業の支援が打ち切られてからは、そのシステムを個人で引き継ぎ、自宅に全サーバを置きました。サーバの出す熱で夏は室温が40度にもなったほどです。メディアキッズは現在終了しましたが、私は今も山口県の「ファーストクラス」を使ったネットワークのサポートを行い、また、山口県情報教育ネットワーク研究会の会長も務めています。



メディアキッズで使用された通信ソフト「ファーストクラス」の画面

発表力が向上

ネットワークを活用した交流学习は、意欲、学力、視野の拡大、学び合いなど全てに大きな効果があったと思います。子どもたちの成績も上がり、表現力や発表力もビックリするほど高まりました。例えば、英語も人前で話すことも苦手な子どもが、福岡で開催された国際学会で「自分の取り組んでいることを自分の言葉で」と指導したところ、うまくこなしたというエピソードもあります。また、卒業後、コンピュータ関係の大学に行った子どももいます。

リーダーの養成が課題

同じネットワーク環境があっても、担当する教員によってICT活用が広まるかどうかは異なるようです。私のモットーは、「ひらめきとフットワーク」で、朝ひらめいたら昼までにはやり終え、次の日には次のステップに進んでいる、といったタイプです。

そういう中心となり、率先して実施する先生がいないと先に進まないと思います。ところが、どの県も目標としている「コンピュータの指導者像」は、「より広く、多くの先生が、よりスムーズにコンピュータを使って指導できる先生」であるように思います。そうした先生だけでは、前に進まないのではないのでしょうか。

10年間を振り返って

「感動の場を提供」がICT活用の原動力

私は元々、「相手に喜んでもらう」、「感動してもらおう場を提供する」ことがモットーです。これは、相手が子どもでも先生でも同じことです。ICTであれ何であれ、その時方法論的に何がベターかを見極めて提供しています。

<成功の秘訣>

プロジェクトを成功に導くには、次の点が重要だと思います。

キーパーソンの存在

キャパシティがあり、一番の情報通であることが大切です。また、ハード情報だけでなく、「こう使うといいんじゃない」といったヒントをくれるような人です。聞かれて「さあ分からない」では駄目です。

先生が情報を発信すること

雑誌に書く、インターネットで発信するなど、自分が実践していることを発信しないと、誰が行っているのか分かりません。情報を発信すると、その先生に情報が集まってきます。